

帰国後 2 週間以内に提出してください（厳守） A4 用紙 4 枚以内 下記項目は変更しないでください。

（海外・国内）インターンシップ報告書

2020 年 9 月 3 日提出

氏名	新居 剛
所属	薬理学教室
学年	4 年
活動先名	機関名 美幌博物館、国名 日本
期間 ① （出発日―帰礼日） ② （インターンシップ 実施開始日―終了日）	① 2020 年 8 月 15 日-8 月 27 日 ② 2020 年 8 月 16 日-8 月 26 日

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

（活動目的）

本活動の目的は、地域博物館に学芸員として勤務し、研究や教育普及活動に従事するにあたって、必要な知識と技術および考え方を現場の学芸員やその他のスタッフから学ぶことである。

（美幌博物館を選択した理由）

美幌博物館は町立の規模でありながら、自然史担当 3 人、埋蔵文化財担当 1 人、美術担当 1 人と学芸員が多く、幅広い分野の地域資源について研究をしている。また、町内の河川環境の改善や年間 100 件を超える学校連携など館外での活動も盛んな施設である。これまで 30 近くの博物館・動物園を見学した中で、将来的には美幌博物館で就職またはボランティア活動をしたいと考え、インターンシップ先として選択した。

・活動内容・成果(2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

（活動内容）

今回、美幌博物館で博物館実習を行ったのは 3 人だった。8 月 16 日に一度実習生と博物館の実習担当である町田学芸員とで顔合わせをし、健康状態の報告を行った。実際に博物館で実習が行われたのは、8 月 19 日から 26 日までだった。ただし、休館日である 24 日には実習はなかった。毎日、実習内容は文学部から配布された日誌に記録し、その日の実習を担当した学芸員にコメントをもらった。

1 日目の午前中は、町田学芸員（自然史）実習全体のガイダンスを受けた後、実際に館内および館外の施設（収蔵庫として使用されている旧美幌中学校）を歩きながら、博物館の施設概要の説明を受け

た。その後、初日に見つけた美幌博物館の特徴と魅力をワークシートにまとめた。午後は、町田学芸員に全展示室（第一から第三）の展示物を紹介してもらった後、もう一度美幌博物館の特徴をまとめ、3人の実習生でディスカッションを行った。

2日目の午前中は、久保田学芸員（美術）に第三展示室の作品について紹介を受け、実習生がそれぞれ作品の特徴について意見を出し合った。午後は、収蔵作品を用いて、額装および額の塗り直し、また美術資料の測定と撮影を行った。

3日目の午前中は、八重柏学芸員（埋蔵文化財）から考古学系学芸員の地域における役割についてスライドを用いた講義を受けた。また、第一展示室の民具資料を実際に見ながら、小学校との連携事業に資料をどのように活用しているのか解説を受けた。午後は、石器を用いて輪郭・稜を方眼紙に写し取る実測実習を行った。

4日目の午前中は、城坂学芸員（自然史）の指導の下、美幌博物館で実施されていたロビー展「びほろの海鳥とオホーツクのアホウドリ」に関連した講演会の受付を担当した。午後は、久保田学芸員の指導の下、美術作品の展示の実際について、キャプションづくり、展示用の板の準備、ワイヤーを用いた作品のかけ方・外し方を学んだ。

5日目の午前中は、城坂学芸員に美幌博物館における学校連携の現状についてスライドを用いた解説を受けた。午後は、博物館近くの公園で植物資料の採集と館内での標本作製を行った。

6日目の午前中は、鬼丸館長（自然史）の指導の下、博物館裏の自然公園で昆虫（トンボ・チョウ）採集と館内で昆虫標本の作製を行った。また、トンボを用いて、種の同定を行った。午後の前半は、八重柏学芸員の指導の下、美幌町内の史跡を歩いて巡りながら、歴史に関する博物館講座で参加者にどのような解説をするか説明を受けた。その後、網走川の河原で貝の化石探しと町内の露頭の観察を行い、地学に関する学校連携事業で子どもたちにどのような説明をするのかについて解説を受けた。

7日目の午前中は、実習の総括として「美幌博物館の魅力」というテーマでプレゼンテーションを行うためのスライドづくりを行った。午後は、用意したスライドを用いて、3人の実習生が美幌博物館の全学芸員の前で発表を行った。発表後、各学芸員からコメントをもらった。



図1 第二展示室の様子。主に美幌町の水辺の生物、農業の歴史に関する展示がなされている。

（活動成果）

本インターンシップの主な成果は、実際に博物館で勤務する学芸員との対話の中で、地域の公務員として必要な考え方、博物館の研究者として必要な考え方、の2つを学ぶことができた点である。

美幌博物館に展示されている資料は、基本的に美幌町で採集・発掘されたものか、美幌町に縁のある作家の作品である。また、美幌博物館の特徴的な展示の 1 つに、町民が作製した模型やジオラマがある。これらの資料を例として、鬼丸館長は地域博物館の使命は地域の資源を見つけることであると解説していた。また、美幌博物館は町田学芸員を中心に、町内の河川において 2011 年からサケ科魚類の遡上を助ける魚道の整備を進めてきた。この活動を例に、町田学芸員からは地域の学芸員には地域の人が会いたがるような、気さくさや明るさが必要であるという話を聞くことができた。教育普及活動が盛んであることも美幌博物館の特徴の一つである。城坂学芸員は、学校連携に関する教員向けのパンフレットの改善や広報の経験から、地域事業において課題を見つけ、それを様々なアイデアや人と人とのつながりによって解決するプロセスの重要性を説いた。実習中、以上のような哲学や経験談にふれたことで、学芸員には地域の公務員として、地域住民と密接に関わりながら生活を豊かにするという考え方が根底として必要であることが分かった。町田学芸員の「地域博物館の学芸員は、自分 1 人だと 1 時間かけてできる活動を、2 時間かけてコーディネートしてみんなで 10 分でやることだ」という言葉には、この実習で教わったことが凝縮しているように感じられた。



図 2 町民によって作製された展示物。左：トンボの模型、右：アイヌの住居（チセ）。

また、本実習期間中では自然史資料の採集および標本作製を実際に行った。博物館にある機材を使ったり、資料を採集するフィールドを歩いたりすることで、将来的に博物館内で可能な（あるいは不可能な）研究手法について明確にイメージすることができるようになった。最も勉強になったのは、全ての学芸員が大学で学んだことを活かしながらも、異分野の研究を行い、研究結果を基に教育普及活動を行っていることを知ることができたことである。トンボ・ホタルを研究の主軸に据えている鬼丸館長は、大学では湿地植物の専攻であったそうである。他にも、植物担当の城坂学芸員はキノコ、埋蔵文化財担当の八重柏学芸員は生物化石を新しい研究テーマとして開拓していた。博物館の研究者には、モノを集めるという基本姿勢を守りながら、特定の分野に囚われず身の回りの事物に興味を持続することが必要だということが分かった。

・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

本実習では博物館業務（収集・展示、調査・研究、教育普及）の複雑さの一端に触れ、何か特別なことをするよりも、博物館の活動により積極的に関わっていくことが、博物館をより理解し、就職した後にスムーズな活動につながると感じた。また、博物館活動に関係する人のネットワークは入り組んでおり、就職したら単純に広がっていくというものではないことも実感できた。本実習の後、美幌博物館にはボランティア登録を行った。来年度以降、資料の整理や講座の補助などから博物館における経験を積んでいきたいと考えている。

また、全く想定していなかったが、地方博物館には頻繁に傷病野生動物が持ち込まれるそうである。オホーツク地域には動物園が存在しないため、よりそういった事態が起きやすいのかもしれない。地域の「獣医」としては、このような事態への対処を求めるニーズがあるそうである。野生動物の対処や、これらを用いた研究についても残りの在学期間で自分なりに少しずつ学んでいきたいと考えている。

・後輩へのアドバイス

自分から後輩へのアドバイスとしては、インターンシップを将来的に就職する業界のニーズを知る機会として利用してほしいということである。また、業界におけるニーズと自分のスキルとのギャップを知り、それをどう埋めていくのかを考える機会にしてほしいと思う。自分の場合は、3年間学芸員の講義を受けているので、現在の博物館業界全体のニーズは把握しているつもりである。ところが、博物館の規模や立地によって、館内での業務は異なり、それに応じて新規に採用する人に対するニーズも異なってくる。美幌博物館の場合は、地域の教育普及活動を担う人材が必要とのことだった。これは大学院の中で学べることではない。自分のように、大学院の後で研究機関以外の就職先を考えている後輩には、特に上記のことを注意してもらいたい。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 薬理学教室 教授 乙黒兼一
---------	------------------------------

※1 電子媒体を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。

※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp